

杉田玄白とともに解体新書を手がけた  
本草学者

# 中川淳庵

なかがわじゅんなん、すぎたげんぱく かいたいしんしょ  
中川淳庵は、杉田玄白らとともに『解体新書』を出版したことで有名ですが、  
薬用になる植物や薬物となる物を研究する本草学ほんそうがくの第一人者でもありました。

中川家は、清和天皇せいわてんのうの末裔とも言われ、もともとは丹波国（現在の京都府）出身で  
したが、小浜藩主・酒井忠音おばまはんしゅ さかいただおとの時に、初代・中川仙安なかがわせんあんの医療技術が見込まれ、小浜に  
移り、屋敷は雲浜村西津福谷町（現在の小浜市西津福谷）に構えたと言われています。

淳庵は、小浜藩医で書家としても有名な中川仙安なかがわせんあんの子で、1739年（元文4年）  
江戸で生まれました。医者の家系であったため、小さい頃から薬草に接することが多  
く、淳庵は若くして本草家ほんそうがとして知られていました。

1757年（宝暦7年）には、田村藍水たむららんすいが会主（主催者）となり、第1回の薬品会  
が開かれ、この時、淳庵も薬草類を出品し、1759年（宝暦9年）の会主・平賀源内ひらがげんない、  
1760年（宝暦10年）（1760年）の会主・戸田旭山とだきよくざんらによって行われた薬品  
会にも势力的に海金砂かいぎんしゃなどの薬草類を出品し、毎年江戸で開かれた薬品会はもちろん、  
大阪で開催された会にも、淳庵は3～6種類の薬草、動植物、鉱物を出品、1766  
年（明和3年）には、淳庵自らも会主の1人となって薬品会を開催しています。

また、淳庵は、幕医の桂川甫周かつらがわほしゅうとともに、長崎のオランダ商館医として来日してい  
た植物学・医学者ツンベルク（スウェーデン出身）のもとを訪れ、植物の和名を教え  
るなど『日本植物誌』にほんしょくぶつしの刊行にも大きく寄与しました。

1764年（明和元年）には、淳庵は、発明家として  
有名な平賀源内ひらがげんないとともに火浣布ひかんぷ（石綿）いしわたを発明してい  
ます。その後、淳庵は、父の死とともに、1770年  
年（明和7年）小浜藩の奥医（幕府に仕え、将軍等の  
診療をする医者）となりました。しかし、1785年  
（天明5年）てんめいに発病し、江戸へ戻った後、48歳で亡  
くなりました。

